

尼子氏の滅亡と「御一家再興」

山梨県立博物館学芸員 中野賢治

はじめに

16 世紀の松江市域・出雲地域

…戦国大名尼子氏の影響下、複数の有力領主が割拠

尼子経久段階から幾度となく大きな戦禍に見舞われてきたが、今回の講座では

- ・毛利氏による尼子氏の攻略
- ・尼子勝久らの尼子家再興戦争

これらの戦乱を通じて、彼ら領主がどのような動向を示したかを中心に、戦争の経緯を明らかにし、

これまで語られてきた「通説」への疑問点をいくつか提出してみたい

1. 雲芸和睦の破綻と尼子義久の降伏

(1) 雲芸和睦の成立と破綻

天文 20 (1551) 年 9 月 陶隆房 (晴賢)、周防築山館を襲撃 → 大内義隆、長門大寧寺で自害

弘治元 (1555) 年 10 月 厳島の戦い：毛利元就、陶隆房を討ち大内氏旧領の接收に着手 (～1557 年ころ)

…備後・備中・石見で尼子氏と毛利氏の勢力が衝突するように

永禄 2 (1559) 年 2 月ころ 将軍足利義輝、尼子氏と毛利氏との和睦を画策 (『出雲尼子史料集』977 ほか)

永禄 3 年 5 月ころ 毛利氏：室町幕府に対して尼子氏との和睦の仲介を申し入れ

幕府からの使者として下向していた聖護院道増が雲芸和睦を扱う (『尼』1024)

→一連の雲芸和睦交渉が本格化

11 月 将軍足利義輝の御内書【史料 1】

→停戦成立

12 月 尼子晴久没、義久家督継承

義久：晴久存命期から文書の発給を行うなど、後継者としての立場は明確

＝継承にあたって大きな混乱はなかった

永禄 4 年 4 月 義輝が元就に石見での停戦を喜ぶ御内書を与えている【史料 2】

…この時期、毛利氏は北九州での大友氏との戦いに注力

11 月 石見の福屋隆兼が毛利方の福光城を攻撃

永禄 5 年 毛利氏、石見に転進し、福屋氏の本拠である音明城を攻撃

→福屋隆兼は城を出て逃亡、その家臣たちも謀殺

同じころ、多胡辰敬も毛利氏に敗れて戦死

6 月 本城常光が毛利氏に降伏

＝石見の尼子方勢力は瓦解、石見は毛利氏が制圧

出雲国赤穴の赤穴久清が尼子方から離反し、毛利方へ

毛利氏：福屋隆兼の福光城攻撃を雲芸和睦違反ととらえ、和睦の破棄を宣言【史料 3】

出雲侵攻を開始

…日野山名氏の山名藤幸を支援して伯耆方面からも尼子領国に揺さぶりをかけ、

備中の三村家親や因幡の武田高信らとともに尼子氏を包囲

(2) 毛利氏の出雲侵攻と尼子義久の降伏

永禄 5 年 7 月 三沢氏や三刀屋氏を始めとする出雲の国衆の多くが毛利氏に帰属【史料 4】

同月末には毛利元就と吉川元春が石見から出雲赤穴に入り、出雲攻略戦の指揮をとる

8 月 毛利氏：鰐淵寺に寺領書立を与え (『尼』1172)、鳶巣城を支配下に置く (『尼』1175)、

＝出雲国西部を制圧

9 月 毛利元就：三好長慶にあてた書状のなかで、毛利方が出雲中部もほぼ制圧し、尼子方の勢力は

「富田一所にあい究まり候」とする【史料 5】

因幡の武田高信や備中の三村家親、備後の軍勢などが富田城に押し寄せる勢いをみせる

毛利氏の工作によって因幡・伯耆や美作方面では、次第に尼子方勢力が弱体化

尼子義久：日御碕神社に対して籠城戦の勝利を祈らせる【史料 6】

＝すでに富田城への攻撃も開始されていた

10 月 毛利氏：山内隆通に対して富田城攻略後の恩賞の追加を約束する (『尼』1190)

＝出雲制圧にはさほど時間はかからないという判断

11 月 毛利氏：本城常光を宍道の陣所において討ち果たす (『尼』1196)

→毛利方に帰属していた熊野氏や米原氏、松田氏などが離反し、尼子方に帰参

情勢は一変、大友宗麟が尼子義久と連携する動きをみせ【史料 7】

北九州の動向も危うくなった

元就：宍道湖北岸の洗合崎に陣を置き、同時に和久羅山を制圧して城を構え、富田城と島根半島とを分断して

尼子方の松田誠保が籠もる白鹿城を攻撃する作戦 (『市史』中世Ⅱ1109)

→毛利隆元を豊前へ転戦させざるを得なくなったことなどから実現せず

永禄 6 年 津田や大東などで両軍の衝突 …戦局に大きな動きはなし

7 月 尼子氏：伯耆国尾高・河岡両城を攻撃、一時は陥落の危機に追い込む

＝西伯耆戦線は尼子方優勢で展開

毛利氏：備後の上原豊将を伯耆日野郡に出陣させ、尼子方を牽制

宮景盛、杉原盛重、山名藤幸らに命じて尾高・河岡両城の防衛にあたる

→結局、両城は持ちこたえ、尼子方は西伯耆への影響力喪失

8 月 毛利隆元、北九州から出雲戦線に復帰する途中で急死

毛利氏：白鹿城攻撃を開始 (弔い合戦?)

10 月 白鹿城陥落

→尼子義久は富田城と島根半島方面への連絡を絶たれる

永禄 6 年末 毛利氏：隠岐を制圧か

永禄 7 年 2 月 伯耆方面で「兵糧留」の実施 (『市史』中世Ⅱ1170)

…籠城中の富田城から毛利氏に投降するものも跡を絶たず

城内では和平 (=降伏) が取り沙汰されるように

永禄 8 年正月 毛利氏：福良山城や十神山城を陥落させ、美保関・境に抑えの城をおいて中海を封鎖

熊野城の熊野久忠も毛利氏に降伏

＝尼子義久の勢力はほぼ富田城の周辺に限られていく

永禄9年6月ころ 富田城からは毎日50人から100人もの脱走者が発生(『尼』1384)

7月ころ 安芸郡山城周辺に所領を持つ内藤元泰が「尼子方宿之儀」についての同心をとりつける
＝水面下で義久の降伏とその後の処遇が議論されていた

11月 尼子義久は弟の倫久・秀久らとともに毛利氏に降伏、富田城を退去
→義久一行は元就本陣の洗合城に送られ、年内には安芸へ下るように命令された
その後、杵築で家臣たちと別れ、12月9日に杵築から田儀へ至り、
石見の河井・出羽・安芸の横田を経由して14日に長田の円命寺に入った
…天正17(1589)年に幽閉が解かれるまで、長い軟禁生活を送ることになる

2. 尼子勝久による「御一家再興」戦争の開始

(1) 勝久軍の出雲侵攻

永禄12(1569)年5月17日付米原綱寛宛大友宗麟書状【史料8】

…尼子勝久らによる軍事行動の史料上の初見

「勝久」が掲げた「御一家再興」のスローガン

毛利氏：6月には「尼子牢人共」の「一揆之企」に対する注意を喚起【史料9】

永禄12年9月15日付日御碕検校宛尼子勝久寄進状・同家臣連署奉書【史料10】

…「毛利」氏が「国中」に「乱入」したことで「既」に「当家」は「断絶」した、とする

「当家断絶之以来三・四ヶ年」、永禄9年の義久の降伏により尼子家は「断絶」した、という認識

＝毛利氏に降伏し、幽閉されている義久の存在を無視

永禄12年6月頃 但馬方面で勝久軍が蜂起、丹後・但馬の海賊の協力をうけて出雲忠山城・新山城へ侵攻

7月 毛利氏：北九州で大友氏と対陣中、主力を動かすことができず

竹矢を本拠とする野村士悦に対し、「富田現形衆」への工作を命じる【史料11】

北九州から出雲へ米原綱寛・坂元貞らを派遣【史料12】

天野隆重の指揮下で「静謐」のため働くように命じる【史料13】

勝久軍：富田城を守る毛利氏配下の天野隆重軍と交戦、以後たびたび攻城戦を行う

8月～12月 勝久、出雲・伯耆の諸勢力に安堵状を発給

国衆らの不在という軍事的空白を利用して勢力を急速に拡大 …「雲伯忿劇」【史料14】

馬木・河本・湯原など出雲国衆が次々と勝久軍に参加【史料15】

(2) 挙兵の背景と諸勢力の動向

毛利氏：1560年代後半、旧大内氏領国を足がかりに急激に勢力を拡大

→九州北部をめぐる豊後の大友氏と衝突、長期にわたる戦争に突入

←大友氏が中心となり、中国・四国にまたがる反毛利氏連合を組織

＝毛利氏包囲網(伊予村上、備前浦上、美作三浦など)を形成

大内輝弘の蜂起

永禄12年5月 大内輝弘(義隆の従兄弟)、山口侵攻の準備に着手

10月 大内輝弘、秋穂から山口へ侵攻、築山館跡を占拠

元春・隆景ら毛利軍の主力が北九州から長府へ着陣

→輝弘、周防富海で追い詰められ自刃

旧大内氏・尼子氏領国で旧臣の蜂起

…毛利氏包囲網の形成、反毛利氏勢力の広範な存在

東西から毛利領国を圧迫

→勝久軍の行動を容易にするとともに、出雲の諸勢力に尼子家再興の可能性を認めさせる

(永禄12年)10月1日付富兵部大夫宛尼子氏家臣連署奉書案・同奉書【史料15】

出雲大社(杵築大社)の上官(上級神官)である富氏が勝久軍に権益の保護を要求

…勝久軍が示した「御寄進なされ、勝久御判形をなされ候」という原案に対し、

富氏が「晴久御判形の旨に任せ、勝久御一通をなされ候」と修正するよう要求

…晴久の安堵状(判形)を富氏が持っているかどうかは、富氏が主張しなければ勝久軍側にはわからない

＝この安堵状の発給は勝久側からの一方的なものではなく、受給者である富氏側が協力したもの

(作成のもととなった案文が、正文とともに富氏に伝存したことも興味深い)

その文言を踏まえて勝久の安堵状が発給される【史料16】

富氏は、晴久の「判形」だけでなく、義久の「判形」も所持している【史料17】

←にもかかわらず義久の安堵でも勝久の寄進でもなく、晴久の判形を根拠とするよう要求している

勝久軍による諸勢力に対する安堵【表】

勝久が行う、いわゆる「継目安堵」において、義久のものを根拠とするものは確認できない

(←義久も足かけ4年の短い統治期間のなかで大量の安堵状を発給している)

富氏のように晴久と義久、両方の安堵状を所持している者が、晴久のものを安堵の根拠とするよう勝久に求める

→出雲の諸勢力が勝久軍を必要としていた

彼らは晴久期の秩序の回復を期待(≠直前の当主であるはずの義久期の秩序)

→勝久軍：「当家」は義久が毛利氏に降伏し、出雲を去った段階で「断絶」した、と位置づけ

義久の存在を無視する必要があった

勝久による「御一家再興」の内実

…勝久軍および勝久軍の支持勢力にとっては、晴久時代の支配体制を再構築すること

(血筋を重視し、体制の変化や領域の違いを無視する近世以降の「御家再興」とは異なる)

義久期を否定し晴久期への回帰を望む諸勢力の要望に応え、その支持を得ることが「御一家再興」への道

(←諸勢力は毛利氏とも接触を持ち続け、どちらが勝っても自身の権益を確保できるようにする)

3. 「御一家再興」戦争の展開と終焉

(1) 第1期 出雲攻略失敗まで

永禄13(元亀元、1570)年正月 毛利氏：赤穴から出雲へ入り、多久和城を占拠(『尼』1553)

氷之上・禅定寺・阿用・福富などの要害を次々と落としつつ

三沢・横田を経由して布部に至る【史料 18】

勝久軍：主力を布部要害に結集（『市史』中世Ⅱ1309）

2月 毛利軍：出雲国布部で勝久軍に勝利（布部合戦）

勝久軍：末次城へ逃れ立て直しをはかる（『市史』中世Ⅱ1310）

4月 毛利軍：勝久軍の牛尾要害を攻略 …以降、戦局は毛利氏優勢に傾く

6月 森山城を守っていた秋上宗信が毛利方へ

→勝久軍の拠点が新山城・高瀬城ほか数か所のみとなる

9月 毛利元就が病に倒れ、毛利輝元・小早川隆景らが吉田郡山へ戻る

→勝久軍：十神山城を占領【史料 19】

富田城・神西城を攻撃【史料 20】

10月 勝久軍：満願寺山を占拠して築城【史料 21】

…新山城と高瀬城の連携を確保しようとしたものか

毛利軍：児玉就英が温泉津・宇龍・加賀など日本海側の要所を制圧（『市史』中世Ⅱ1406～1410）

=日本海および宍道湖・中海の制海権を奪回

～12月 毛利軍：十神山・本庄・満願寺山など海に面した拠点を奪還

元龜2年正月 毛利軍：勝久軍が新山城に停泊させていた「大船」を破壊【史料 22】

=勝久軍の本拠に「大船」を停泊させることができる施設が存在

→勝久軍にとって制海権を失ったことは致命的といってもよいほど大きかった

このころ、新山・高瀬城から脱走者相次ぐ

←吉川元春：両城の連携を断つため、脱走者をすべて誅伐するよう命じる【史料 23】

3月 高瀬城の米原綱寛が開城して降伏、綱寛は新山城へ送られる

5月 勝久軍：備前浦上氏に救援を求めて使者を派遣するが捕えられ、内情を知られてしまう【史料 24】

6月 毛利軍：勝久軍の隠岐氏・多賀氏を降す

毛利元就死去

8月 新山城陥落 →尼子勝久、隠岐へ脱出【史料 25】

山中幸盛・立原久綱ら勝久軍の主力は因幡・但馬方面へ転戦

(2) 第2期 因幡・伯耆転戦期

元龜4（天正元、1573）年

3月頃・6月頃 山中幸盛ら、但馬から因幡へ侵攻、隠岐から尼子勝久を迎え入れる（『尼』1756）

9月 勝久軍、因幡鳥取城を攻略、美作方面への進出をはかる（『尼』1765・1766）

天正2年3月頃 山中幸盛、因幡私部城を拠点に大友氏や伯耆・美作国人らと連携を模索（『尼』1773）

11月頃 山中幸盛、美作高田城の防備を固める（『尼』1783） …因幡・美作国境地帯での軍事行動

天正3年1月 但馬の山名氏が毛利氏と全面和睦 …因幡の勝久軍は孤立

3月 勝久軍：織田信長と接触、協力を仰ぐ（『尼』1792）

ただし信長は表面上は毛利氏と友好関係を保つ（『尼』1797）

6月頃 勝久軍、因幡若桜鬼ヶ城を攻略、拠点を移す（『尼』1796・1798）

9月～10月 吉川元春・小早川隆景ら、私部城を攻略、ついで高田城を攻略

勝久軍、若桜鬼ヶ城で吉川・小早川軍を撃退

天正4年1月 播磨の別所・小寺・浦上らが信長に謁見、毛利方と決別

→織田対毛利の戦いが不可避に

吉川・小早川ら対応協議のため因幡を離れ安芸へ帰国

2月 將軍足利義昭が毛利氏を頼って備後鞆の浦へ

=織田・毛利の全面戦争へ

5月 勝久軍、若桜鬼ヶ城を退去（『尼』1808）

…因幡国人の離反や信長勢力との連携模索など、いくつか理由は考えられるが、実態は不明

(3) 第3期 織田政権下、対毛利氏の最前線での戦い

天正5年10月 織田信長、山中幸盛への全面支援を表明（『尼』1815）

このころ、信長から離反した大和松永久秀を攻める軍勢に勝久軍が加わっていたともいう

…所領に基盤を持つ軍隊から、傭兵勢力へと変わりつつあったか

11月 羽柴秀吉、播磨上月城を攻略、勝久軍を入れて防備を固める（『尼』1816）

12月 尼子勝久、熊野神社に安堵状を発給【史料 26】

…この段階でもなお勝久軍を支援する勢力が出雲に存在

勝久軍も出雲復帰をあきらめていなかった可能性が高い

天正6年2月 播磨の別所長治が織田方から離反、播磨東部が毛利方に帰属

…前線の羽柴秀吉らが取り残される格好に

4月 吉川元春・小早川隆景ら、播磨へ侵攻し上月城を包囲（『尼』1822）

5月 羽柴秀吉・荒木村重ら織田方の援軍が上月城に向かうも救援失敗

6月 羽柴秀吉、上月城から撤退

7月 上月城落城、尼子勝久自害、山中幸盛敗死

=尼子家再興戦争（1569～78）の終焉

おわりに・今後の展望

全国的な有力領主家の「断絶」と「再興」をめぐる状況

肥前龍造寺・豊後大友・越前朝倉など、「再興」をキーワードとする戦争が16世紀後半に継起する

信濃小笠原・信濃諏訪など、武田・織田との戦いのなかで断絶した家でも近世に（主に家康の計らいで）

再興している事例が多くみられる（⇒信濃村上）

→中世末から近世初期を「断絶」ではなく「連続」したものにとらえる視角

あるいは、同時代の人々がそうとらえようとしていた、という見方

地域社会にとって、被支配層にとって領主の家が「再興」することの持つ意味とは

戦国後半期～近世初期の戦乱の大規模化・近世的秩序構築の過程は、無数の武士の「家」の断絶と再興の過程

ともいえるのではないか

【表】尼子勝久による継目安堵とその根拠							
No	年	月	日	宛所	安堵内容	根拠	典拠
1	*永禄 12	8	9	瑞泉寺	寺領	経久・晴久任判形之旨	『尼』1456
2	永禄 12	8	10	吉田四郎三郎	同名中五人の跡職五千貫分	祖父如宮内大輔故(殿)時	『尼』1459
3	永禄 12	9	6	雲樹寺	雲樹寺	任先規数通証跡	『尼』1473
4	*永禄 12	9	19	国造千家	社領	如晴久代	『尼』1480
5	*永禄 12	9	20	神門寺	寺領分役等	如晴久代	『尼』1482
6	永禄 12	9	20	大社	大社定燈免	晴久判形旨	『尼』1483
7	永禄 12	9	20	鰐淵寺	寺領直江郷・国富荘・同散在分、諸郷のうち坊々経田等	如晴久時有御知行	『尼』1484
8	永禄 12	9	20	太田新右衛門尉	伯州大坂八幡宮神主職	数代之判形之旨	『尼』1485
9	永禄 12	10	1	経久寺	経久寺	如前々之	『尼』1493
10	永禄 12	10	1	富兵部大輔	林木橋爪名一名	如前々	『尼』1494
11	永禄 12	10	1	富兵部大輔	大社御領のうち当知行	晴久一行之旨	『尼』1495
12	永禄 12	10	1	神主口(雲)四郎	塩冶八幡宮神主職	当知行	『尼』1498
13	永禄 12	10	3	—(日御碕神社か)	日御碕定灯田	任晴久一行之旨	『尼』1499
14	永禄 12	10	6	定光寺	伯州久米郡定光寺	代々判形之旨	『尼』1501
15	永禄 12	10	12	—(迎接寺か)	寺領	如前々	『尼』1506
16	永禄 12	10	15	神門与三郎	杵築大社大工職	代々筋目以相抱	『尼』1507
17	永禄 12	11	4	吉田彦四郎	室・御供宿・年規買地分田畠屋敷等	如前々	『尼』1516
18	永禄 12	11	13	光徳寺	伯州八幡郡上郷公文名のうち寺領山林	任晴久判形之旨	『尼』1521
19	永禄 12	12	1	丹波屋彦兵衛尉	杵築拾六室のうち前々より抱来る分	任先御判形之旨	『尼』1527
20	永禄 12	12	2	喜佐四郎左衛門尉	国富のうち金山散田	従前々抱来之由	『尼』1528
21	永禄 12	12	14	芳蔵主	法勝寺のうち経久寺	前任任譲状之旨	『尼』1532
22	(永禄 12 か)	—	—	浄音寺龍尊	当知行の浄音寺領・宝蔵寺領・伊弉諾神宮寺領・能満寺観音分領・佐木之浦	数代之任御判形之旨	『尼』1543
23	永禄 13	4	19	杵築の西彦三郎	当知行分	任当知行之旨	『尼』1593

(年の*印は推定、『尼』=『出雲尼子史料集』)